**理容師の仕事を支える言語行動**

**―理容室における語用の事例研究―**

名塩　征史　（北海道大学）

　本発表では、理容室での〔理容師—被理容者〕間コミュニケーションを観察・分析し、その場に特有の環境的・慣習的条件のもと、言語行動（発話）がどのように実践され、どのように機能するのかについて記述・考察する。

　Silverstein（1993）によれば、「語用（pragmatics）」とは、生起する記号形態（たとえば、発話）がその場／コンテクストとの間に持つ指標関係の全体を指す。いかなる指標記号も、それを取り巻くコンテクストを前提的に指標しながら、もしくは創出的に指標しながら生起する。またその過程で刻一刻と更新されるコンテクストとの関連から、諸記号間の関係性をその場に適した出来事として秩序立て、テクスト化するような結束性のある構造が浮かび上がる。Mey（2001）では、こうした構造を基にコンテクスト化された適応行動を「語用実践行為（pragmatic act）」と呼び、行為主体が自身をその場のコンテクストに適応させ、同時にコンテクストを自分自身に適応させる行為の一例であるとした。こうした（社会記号論系）言語人類学における議論を鑑みれば、我々の普段の何気ない行為の認識・実践には、コンテクストの組織化が、すなわち周囲の環境の把握、多種多様な変化への気づき、経験的・知識的な前提の引き出し、そしてそれらを他者の行為の認識に向けて、または自己の主体的な行為の実践に向けて適切に切り結ぶことが、どれだけ重要な基礎的事実であるか、改めて確認することができるだろう。

　本発表では、まず分析の対象となった理容室に特有の環境的・慣習的制限について確認し、それらを踏まえて組織化されコンテクストの影響が〔理容師—被理容者〕間で実践されるどのような行為に現れているのか、その実態を明らかにする。具体的には、鏡を介して実現する1) 様々な指示行為とそれを巡る「直接／間接知覚」（Gibson 1979/1986; 1982）の連接、そして2) 「儀礼的無関心」（Goffman 1963）に関連した声を抑えた、もしくは声を出さない発話の認識・実践について分析し、その様相と機能について述べる。

　また各言語行動（発話）がその場を分析し、指し示し、語ること（Reed 1995; 喜多 2002）は、自己を周囲の環境と接続し、その認知的手続きを主体間で互いに表明し合い、その適応性を承認し合うことを可能にする。このような表明と承認が理容室における協調的な相互行為の実現にどの程度まで必要となるのかについても一考を加える。

【参考文献】

Gibson, J. J. (1979/1986). *The Ecological Approach to Visual Perception*. Psychology Press.

**Gibson, J. J. (1982). *Reasons for Realism*. Edited by E. Reed and R. Jones. Lawrence Erlbaum Associates.**

**Goffman, E. (1963). *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*. Macmillan.**

喜多壮太郎 (2002). 『ジェスチャー：考えるからだ』金子書房.

Mey, J. L. (2001). *Pragmatics: An introduction.* Malden: Blackwell.

Reed, E. S. (1995). The Ecological Approach to Language Development: A Radical Solution to Chomsky's and Quine's Problem. In Language and Communication, 15(1): pp. 1-29.

Silverstein, M. (1993) Metapragmatic Discourse and Metapragmatic Function. In John A. Lucy (ed.), *Reflexive Language: Reported Speech and Pragmatics*. Cambridge University Press: pp. 33-58.